

Title	田中大秀 土佐日記解翻刻
Author(s)	長谷川, 信好
Citation	大阪外国語大学学報. 17 p.263-p.280
Issue Date	1967-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80288
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

田中大秀

土佐日記解翻刻

長谷川 信好

はしがき

本稿は、大阪外国語大学附属図書館架蔵の田中大秀筆「土佐日記解」の翻刻である。

同稿は美濃半紙綴本で、表紙に「土佐日記解 一 四拾六葉 十二月廿一日より廿九日迄」とあり、四十六枚裏の余白に、「天保二年四月十四日書畢」の附記が見える。ところで「土佐日記解」には、別に旧帝国図書館蔵稿本が存して、国文学註釈叢書中に加えられて、昭和四年に出版されたものがある。それは上下巻揃って、上巻末には、文政九年正月十八日註畢、とあり下巻には、文政十二年己丑八月廿七日到着、とあって更に、本町六丁目、桑名屋半左衛門の板元の名前が記されているところから、この日付は脱稿の日付ではない。とにかく、すると本稿は叢書本稿本上巻から五年後のもので、再稿本に当るものである。事実内容と比較すると、全部にわたって本稿は一そう精密さを加えていて、大秀の五年間の不断の研究の跡が如実にうかがえるのである。此度あえて本稿の翻刻を試みるのもそのため以外ならない。加之、叢書本に見られる誤読の訂正される便もかなり多いとおもう。しかし何分本稿は、全くの大秀自筆稿本のこととて、頭注、書入、抹消、附箋等々実に多々入乱れ、その上書様もまた一様でないゆえ、解説がむづかしくそれだけに誤読もまた無しとしないが、それらは後考に俟つこととして、一応ここに翻刻に上せる次第である。ただ遺憾なことに、本稿は表紙の附記のように土佐日記本文の十二月廿一から廿九日までの註釈で、叢書本上巻の約半分の分量にすぎないが、実は表紙に次のような附箋があって、

土佐日記解第一第二差上候「此書まことに〱大事紛失無之」奉希候しちやくちやはくるしからず候」乙巳九月十二日 大秀謹言 神楽園君御許

これによると、本稿は右の「第一」部に相当するのではなからうかと考えられる。もしそうとすれば、この第一第二で大体叢書本上巻分の内容になるものとおもわれて、或はこの再稿本は完成を見なかったのではないかとおもわれる。附箋に見る「乙巳」は弘化二年に当る年で、同四年には大秀は死去しているのである。因に神楽園なる人物は、大秀の知人乃至門人であろうか、未詳である。

最後に本稿が本学附属図書館に架蔵されるに至った経緯については、本稿に添えられた元本学（大阪外事専門学校時代）教官井上翠先生の手記に明らかであるから、次に掲げることにする。

これの一巻は田中大秀大人のものせる土佐日記解の稿本なりその昔我東京にて国学を学ぶつる頃友人より給ひしものにてそれより五十年深く蔵して人にも示さざりき頃日大阪外事専門学校にて古き書を聚めて人に観する催ありつら／＼惟うに此の書は大人が心を苦しめ力を尽し自ら筆を執りたるものなれば私に蔵すべきにあらずこれを機に学校に奉り人にも見せ世にも出づるならば大人も地下にて喜び給ふらめ然なり疾く疾くと之を学校に献るなり

昭和十二年十月

井上 翠 するす

なほ、現存の本稿は、去る昭和三十五年春整本屋において祝融の災をうけて、幸い全焼を免れたとはいえ、一部欠損して全容を止めないが、その前にフィルムにおさめてあったのでそれによって翻刻を試みたものである。（長谷川信好記）

をのこのすといふ日記といふものををむなもしてこゝろ見むとするなり

○をのこの」諸本をとこと有を鈴朱本にをのこ片本に男と書てヲノコと訓たるに従て改つ。御杖主云をとことめは若き男女を云称なるが故に男女の情色に關する時は必をとことめと云り。ただ男女の差別を立て云時は必をのこと云る事古来通称なり。神代紀に少男此云鳥等孤少女此云鳥等咩と見えて、古事記に於是伊邪那岐命先言阿那尔夜志愛袁登壳袁後妹伊邪那美命言阿那尔夜志愛袁登古袁とあり。統紀卷卅に宝龜元年三月歌垣の歌に、乎登壳良尔袁登古多智蘇比云々。万葉六丁五に千万の軍なりとも言挙せず取而可来男常會思大秀が写させたる灯の本此下十行許白云々あつまをとこの妻わかれと、女に關て云と不関云との差別乎能古と讀分られたるを以て其別ある事を智べし。後の物にも古今序にをとこをうなの中を和らげ。大秀云ヲトコ伊勢物語に、昔をとこ有けりを初て教へあへず。源氏物語に、夢浮橋卷、大將殿とは此女二宮の御をとこにやおはしつらん。上若菜に、女は男にみゆるにつけ云々。又をのこ有は三代集等に、上ののこども云々、

藏人所のをのこども云々など見えたり。桐壺に、玉のをのこのみ子生れたまひぬ。をとめ巻に、各々十に余給ひて後は御方異にて睦まじき人なれどをのこ子には打解まじき者なりと父大臣聞え給ひきとあるを思べし。女に配する時はをのことといひ女と別を立る時はをのこといふ。和名抄に男説文云大夫也和名乎乃古また夫白虎通云猶扶也以道扶掖也也和名乎宇止一云乎止古とある訓の様を思て今云処を知べしと猶甚委云り。(又石川雅望が雅言集覽にをとこ男はたゞ男女の男也但男女の道男女の中にいへり普通にはヲノコといへりと云て証を掌たり)今按に理はさる事とも聞ゆれども此証どもは猶慥なりとも思えず。万葉集中に乎登古と仮字に作る処はあれど乎能古と作る処は未得見ず。壮士丁子と書るは乎乃古とも乎登古とも訓べければ証とし難し。卷六の男常會思或人タケヲト訓りまた丁六に、士也母空かるべき万代に語続べき名は不立してと有はをのこ^{ヲノコヤモ}と訓てをのこととは着なく聞ゆめり。又(古事記水垣宮殿に初令貢男弓端之調女手末之調とあり。伝^{廿三ノ}八十七丁に男は袁等古と訓べし。記中袁等古には壯夫と書て少壯なるを云男字はたゞ袁と云にあたれども又老少をいはず。なべて袁等古袁美那と云る事あり。万葉廿に秋野には今こそゆかめものゝふの乎等古乎美奈の花にほひ見に。△此歌は一二三四二五と句を次第てみべし。男女の花と云にはあらずなどよめり。)卷廿なる物部の乎等古乎美奈乃とよめる、竹取物語なる裳着の祝の処には、唯男女差別の言にて情色に拘らねば乎能古と云べき処なるを、を^ヲとこ^ヲをう^ヲな^ヲきはらず喚集へと云ひ、赫映姫を恋る人々は情色の事なれば乎登古と云べきを、世界のをのこ^{アラナイイシキ}貴も^{アラナイイシキ}賤もと有、されば何とも定難けれと姑御杖主の説に依をのことある本に従つ。烏登古は小津子なり、津は助辞子は男子の通称なり。烏登咩は小津女なりと谷川氏云り。日子日女むすこむすめと対する同意なり。子と云は愛親^{メデシタシ}て云称と聞ゆ。中昔比より某子と専女に云。古代は石押分之子丸邇臣口子中臣鎌子連など男には多く云り。^{玉勝間八の十四丁}袁能古の袁は男なり。古は子なり。

(童形をおとなに成をを^ヲとこと云り。続古事談下の卅六丁左に、いまだいとけなき童にて有けるをオトコになしてとあり。オとかけるは例の誤なり。万考三下五丁^{ヲトコ}壯士。を^ヲとこ伝廿三の四十七丁神壯夫。廿五日の条、をのこらまでに。正廿日条に、をのこもじ。勢語卅九段藤井新釈本に、むかしわかきを^ヲのこ云々の女をおもひけりと有。男字カケル本モアリ。塗本類男とかけり。古今秋上うへのをの子ども、うへにさぶらふをのこども。夏、さぶらひにてをのこども酒とうべけるに。雑上、寛平御時、老ぬとての詞書うへの侍にてをのこども。ヲトコ 古今雑下に題しらず、我をきみ難波の浦に有しかばうきめをみつのあまと成にきとある下に、此歌はある人、を^ヲとこ有けるをうなの、男とはず成にければ難波のみつ寺にまかり、あまに成てを^ヲとこにつかはせりけるとなんいへる。同卷、風ふけば沖つしら波立田山云々。此歌はとある下、此を^ヲとこ云々、を^ヲとこの

心のごとく云々と有。むかし大和国なりける人のむすめに、或人住わたりける云々、このをとこかふちの国に人を相知て通つゝ云々かふちへ行毎に男の心のごとくにして出しやりければ云々。同十九ハイカイ。いとこなりけるをとこによそへて人の云ければ、くそ、よそながら我身にいとよるといへばたゞいつはりにすぐばかりなり。後セン、左大臣実頼公ノ家ノヲノコ、ヲンナコカふりし裳着侍けるに、貫之、大原や小塩山の小松原はやこだかゝれ千代の陰みん。をのこと云に對へてはめのこと云べし。伊勢物語五の八十六段五十六丁芦屋里の処に其夜南の風吹てなごりの浪いと高し。つとめて其家のこどもいでゝ、うきみるの浪によせられたる捨て家の内にもて来ぬ、とあるを藤井氏云、女の子は女の子なり。常には婦人又女人の字メノコと訓たり。吹上巻に、舟どもに女の子ども下立て染草洗へり。又是は打物の所ごたち五十人計めの子ども卅人計、と有を見るに中昔の比は下輩の女を云るやうなり。按に、廿六日条に、をのこらまでに、といひ古今に、上に候ふをのこども、ヲノコと云も下輩と聞ゆ。そはらといひどもと云事有故か、可考。勢語五ノ五十七オ、めのこ。

○の「は諸本もと有を、考異本に従改、専男の爲る態なるを今始めて女もしてみむとなり。されば男もとては次に女もと云語勢不応。○すといふは諸本すなる、男の所作を唯纔に聞及たる由にて女の慥には不知さまなり。かくてぞ次の日記といふものといひ、女も爲てみむと云るにも着々しかなる。すなるにては男のわざをよく知たる意なればつきなし。○日記といふ物」とは、凡て其物其人などを世に広く不知を今取て云時といふと云言を副て云なり。是女として男の世に普くする態なるを、慥には不知よしにて上に爲といふと有にも能応て聞えたり。○をんなも」は正しくは袁美那と云言なるを、後世音便にてをんなともをうなとも唱なり。竹取物語解一の四丁十四丁にをうな、古今序にをうなと有に従て此も然改めむとしつれど、諸本皆かく作れば當時は兩様に云るも有べし。(をんなの事、記伝九の十八丁。靈異記下十嬢ヲミ八条嬢ナノ姫那。和名抄、姫於无那とアリ。袁无那と云名目ハ不載。統記十三に紀朝臣意美那とあるを、五には音那又同卷に家原音那とも有と師云れたり。香川景樹土佐日記創見一ノ一に云、女もしてと云るに女ならざる事しるし。態と裏表を云て女の女ならざるを見えしむる也と云り。○としては爲て也。○こゝろみむとて」は心と云言なき本も多し。宇治拾遺物語三の雀の持来し瓢の、廿四丁に種を得たる処に、されば植て見むとて植たればとあり。心と云言なくても誠の意なれば何にても宜し。○とて」はと思て、と云てなど云べきを省略たる辞なり。為本にと思てとあるは不取、唯とてにて足れり。○するなり」為と云言は詞八衢に佐行の變格の言にて、せしするすれと活けり。下知にはせよと云。字典に作造、爲也とあり。(字テン何ノフリ)○以上日記と云物女にて爲る例なきを今始めて爲る由を先断れるなり。

これのとしのしはすのはつか余ひとひの日の戌のときにかとてす其よしさゝか物に書つく

○これのとし諸本それのとしと有、美本に従改 承平四年甲午なり。このそのをこれのそれのと云は、古言の一格なりと師云れたり。(古事記に此之鏡者)按に此と云へば今の事にて親しく、其と云へば彼と云に同じく昔在し其年を差て云言にて疎し。此記船中にて書初て次々當日ツヒ或は翌日アシタなどに書れしなるべし。(九条師輔公殿の日中行事といふものに、記昨日事多日ハ、ニ中可レ記とあるは毎日々々一日の行事なり。拾芥抄下本四十丁に載たり。此日記も如此なるべし。)されば最竟イヤハテの言に、とまれかくまれ疾破てんと云れしも、京に還着て後数日を経て後、或は年を隔て過去し事を書れし趣とは聞えず。されば其の年と余所ヨツケ氣には云はるまじく思ゆ。されば此のとある本に従つ。○の字モジに依て補年月の下に必付て云例なり。竹取物語廿四丁玉の枝段に、さをとゝしの二月十日ごろに(伊勢物語に、又のとしのむつき十日ばかりにとみえたり。大祓祝詞に、今年六月晦之大祓尔と書たるを師はコトシのツコモリノヒののを付てよみ、自の文にも天明乃七年云年之五月乃月立など書れたり。)○しはすの「谷川氏云、しはすは歳極トシハツの義なるべしと云。県居翁も語意考に、十二月をしはすと云は登志波都留月の上下を略き都と須を通はし云りと云れたり。万葉に、昨日杜年者極之賀。玉蜻日記中二のセテウに、十二月をはての月といへり。師説は、古事記明宮段の歌に、波都邇、志波邇とある、伝四卅二丁に、はつには初土、しはには底なる土と云事にて、志波とは物の終を云と聞えたり。年の終の月を志波須と云て極月と書は例なりと有以上。殿村久云、玄孫をやしは子と云るも弥極子の意なるべしと云り。和訓栞に、あさっては明日去て也と云。大秀は明日在ての意と云。何ならん可考。さてしあさっては四日目にて四明日去て也と云は非なるべし。此しはの説の如く末の意なるべしと思はる。○廿日あまり一日の日の「按に一日をひと二日をふつかのひと云べき理也。然るをひとひのひと云ては徒に言重れるが如し。廿日余一日と云へば其日の昼夜を云て夜に入ても廿一日の分にて戌時亥時なども云べきを廿一日の日のと云て夜の戌時をしも云るは着々しからず。夜の」とあらまほしく思はるれば始は日のと云言なき一本類に従て改んとせしを、うつほ物語の祭使卷廿九丁右に高元の帥あて宮を迎へむとし給ふ処に、彼若君の迎すべき日廿日あまり一日の日となむ定たる。又続世継卷一に、後一条の帝は云々寛弘五年九月のとをかあまりひとひの日生れさせ給へりと有に従て、又諸本に従つ。当時かく云言なりけむかし。猶一日の事次に云べし。さてけふ丁亥日なる事正月廿九日の下に云べし。○戌のときにかどです」是は先一わたり言結て、次に立復て首途より先に有つる事を委しく云文にて、古事記に伊邪那岐命黄泉國故吾者為御身之襪而云々襪被也と有て、次に被の御態を細に御身に着る物を脱棄給ひ、中瀬に下潜キキ瀦給ひし事を云たる同格の文なり。故下に夜更ぬと云へる即此戌時の門出を差せり。(かどでは門出にて物へ行に住る家の門を出て旅路に向ふを云。万葉十四丁に、我駒が可度氏乎しつゝ出がてにせしを見たてし家のこらはも。万廿長卅三丁、丈夫の心振起し取よそひ門出乎すれば。)

○其由いさゝか物に書つく、と云言此一部に係れり。公事なれば私の冊子などに少し書付る由なり。小字聊字を書り。下にも正十いさゝか雨ふる。二月雨いさゝかふりてとあり。小浪サ、レイシ、サ、キ廿六、小石、雀などのさゝ皆同じ。○以上は此書の発端なり。

ある人県のもとせ五年はてゝ例の事とも皆しをへて解由なと取てすむ館よりいてゝ船に乗へき所へわたる

○或人」とは国守なり。紀大人此日記を書るゝに、婢女などのかける由に託たれば、いづれの国の守ともいはずおぼめかして斯くは云るゝなり。○あがた」とは元晶の事にて朝廷の御県を云ひ、遂に御料を云事となりて任国へ下を県へ行など云事となる由巻首に云つ。○四年五年はてゝ」は任限の事は首巻に云つ。抑紀大人延長八庚寅年より承平四甲午年まで五年の收納を掌どられしなるべし。此にかく云れつるは唯凡に四五年と云にはあらで一秩四年の定を延任によりて五年にられし由を恠に斯云れしと聞ゆ。翌年二月京の家に着れし処にも五年六年と云れしも出入六年に係ればなり。思合すべし。師云、年の数を云には三とせ八とせと云。とせは年経なり。穀を一度取収るを一年と云と九伝いはれたり。○れい」は例字の音なり。字典に例力制切。音厲。比也。

類也。槩也とあり。此字ためしと訓て常有てするやうの事をいへり。祝詞宣命、伊勢大神宮祝詞に常毛奉流云々、常毛仕奉留云々など有。違例不例などは常にたがへるよしなるにて知べし。○をへ」は終、竟字又極字を訓り。下二段をへはをはると同言也。をへは中二段活。古事記みとのまぐをへはるは四段活。

約竟以とある伝四に竟は只軽くみても有なむ。又極て尽す意にも有べし。万葉十九に、春のうちの樂終者梅花手折持つゝ遊に有へし。樂事の至極を云り。太秀云、軽見てとは始終と對る時の意也。○例の事ども皆しをへて」は前官の人、後任の人へ官税公事等種々の國務引渡の事共を皆

為竟てなり。○解由など取て、解由の事は御杖主が説を上にて委載つ。されば此には心得安かるべし。抑解由と云は受領任国に下て一秩イナチツ字典に秩直一切、増韻ニ職也。四年の間毎年民より收納たる年

貢の稲の束数を計帳に記して何程は京の官に上せ、何程は国の官庫に納たる由を勘解由官へ出して奏聞したるを秩満て交替の時勘解由官より後任の守へ前司四年の計帳稲数を勘定して何程は京

に收納め何程は国に残れる由を記し是に相違なき時前司に可レ与解由状を書て渡せるを後任の守国に持下て残稻等を前司より改受取て未進なく无レ滞を以彼解由状を前司に与れば其を受得て前司其秩をめてたく勤竟たるなり。さて前司任中に京に上せたる計帳また残稻等相違事あれば後司

かの解由状をわたさずして其趣を京なる勘解由官へ申送るを不与解由状と云。かくて前司と後司と論あれば勘解由官より使を下して其論を檢るを勘解由使と云。さて其前司新司の下て百廿日の間に未進を償ひ勘定済めばよく若未進の勘定不レ立ば科レ罪事なり。又延期と云は病に依て速に上レ京こと不レ能は其由を申ことわる事なり。○なと」は猶他の取れる物ある由か又唯言を緩めて

副て云へるか。○取て」は江次第の鈔に、今按前司以往之雜意載ニ与^テ状ニ已^ニ言上畢然而依^テ無^ニ当任之雜意又与^ニ解由^ニ其時旧吏取^テ新司解由^ニ状ニ進^ニ官とある、取に同じ。○すむ館よりいでゝ館は国司の居所にて其国府にあるものなり。字典に館、古玩、切音貫玉篇、客舎、礼注、公館、若今、泉官舎也とあり。(和名鈔^居處に唐韻云館^官反作館^{和名}多知。三代実録^{四十}のに遠江国司言前司時焼亡官舎二十五字倉一百四字云々とあり。是にて官舎の状可思。○さて此の文。はてゝ、しをへて、取て、出て、と(古事記、御うけひの段^{伝七}の、岩屋段^{伝八}の五十八丁にも而てふ辞多重れり)て字多く遣ひたり。其つかふべき處には幾つ重なりても聞苦からぬものなり。心得置べし。○船に乗べき所へわたる」は大津へ度なり。藤井氏^{詞書三}に云、凡ていつくへと云るといつくにと云たるとを考るに差別なきもあり。異なるもあり。大方何処へと云て何処にと云るは稀なり。古今の詞書に、「人の国へ罷けるを、「みちの国へ罷ける人に、「東へ友の云々など多く引出、にと有は後撰に、「下野に罷ける女にと有と小大君集に、「物にいきてとあるのみなるよし云り。御杖云、に字は其処に居る詞なり。へ字は其方角を指詞なり。故に古今に、「僧正遍昭が許に、奈良へ罷ける時にと書れたりと云り。故附本の本にと有はとらず。抄に国府の館より出て船に乘に便よき家あるに先其所まで移れたるなりと云り。斯て廿六日まで其に在れしと見ゆるを正月卅日条に船に乘し日より卅日余こゝぬかに成にけりと有を思へば前司は官舎を退出て直に舟に移らるゝ事なるべし。始めて漕出られしは廿七日大津より浦戸を指てとあれども甚しく云むとて門出の日より算へたるにもあらむ歟。さて此も前条の如く言を結て又其有し事を次に云るなり。○わたる」とは、唯通過るを、いせ物語に、昔男後涼殿のはざまをわたりければ、後撰恋三に、男の門よりわたるとて、など常なれど又こゝの如くたゞ行と云べきをわたるともいへり。後撰恋三に、大納言国経朝臣の家に侍ける女云々中略、贈大政大臣に迎られてわたり侍りければ、「むかしせし云々、雑一に、京極御息所仁和寺に、と有はこゝに同じ。(拾遺^雜上參議女上が女の月のあかきよ門の前をわたるとてせうそこ云入侍ければいせ「雲ゐにて相かたらはぬ月だにも我宿過てゆくときはなし 後撰雨にもさはらでそら物語などしける男の門よりわたるとて雨のいたくふればまかりすぎぬるといひければ、「ぬれつゝも。(○わたる」とは、勢語三十段式ごたちの局の前をわたるに。九十九段六の廿三昔男の後涼殿のはざまをわたりければ。後撰恋三むかしせし哥詞書に、大納言国経朝臣の家に侍ける女に云々贈大政大臣に迎られてわたり侍りければ云々。同雑一ひとりのみ詞 あつみのみこ 京極御息所尼に成て戒うけんとして仁和寺にわたりて侍れれば。)

これかれしるしらぬおくりす年比よく見えつる人々なむ別かたくおもひて其日しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜更ぬ。

○かれこれ」は下^{廿七}に守の兄弟これかれ又正月廿七日も又此と下と^{二月}かれこれと抄あり。(灯

六二月可考）後撰集の詞書を見渡すに是彼とも彼はとも有て一定ならず。今俗には彼はとのみ云五日。是は近く彼は遠き意なれば次の知は親しく不知は疎にも不叶れば此は考異本に従て今改つ。

○しるしらぬ妙考知しらずとあり 古今一見一見ずもあらず見もせぬ人云々の返しにしるしらぬ云々、後撰に丸しるもしらぬもなど有此と同語勢なり。故法本宜国守帰京の門出なれば能知られし人々は更にて郡司村長の輩常はをさ／＼参らねば其顔をも見しらぬ者ども／＼多送に出たるなるべし。○

おくりす」旅行人を送るを見送とも見立とも云り。万葉四に、見立し家の子等はも已が任（ワサ）の下に引つ師云見立見送と云見は其事を身に受て

として知行を云と記伝四、十八丁に云れたり○年ころ」は年を経し事を云。月ころ、日ころ、夜ころなと同例なり。○よく見えつる」は拾本に従改諸本ぐし附本能来つると云事にて紀大人任中数年の

間折々来て睦しうせられし人々なり見えの事は下門出を送る人々を知不知と凡に云て此に別て親しみて別難くする人々を掌られたり。○人々」と言を重るは人数多き由なり為本人に○なむ」は師

説に文章になんと係る辞多しそと云べき処をなだらかにのどめて云辭なり。○別がたく思ひて諸本に徒抄本わか

たれと有はわろし○其日諸本なし妙考○しきりに」はしきしきと云言の活たるにて継重なるを云と師記伝廿七云れき。此知られけん人々は女たち童たちなども有て門出せられぬ前日サキよりも別惜く云

居たるが其日と成てわりなく頻に別難くせる状なり。○とかくと云言は古くはかにかくになど云しを後にはともかくもなど云り。万葉ニに夕の彼往此往と書又四ノ卅六丁六ノ廿二丁左右と書又

十一ノ廿カクカクニ云々物者不思とある哥を拾遺に載てとにかくにと訓、江談抄全文下十七日に東行西行をとざまかうざまに行てとよめり。是等を按にこれかれと云に同じく種々其と不定やうの意なり。さ

て此は別離を惜み悲みて泣歎などしつるを顕露には不云てとかくしつと云紛はされしなるべし。泣悲しみけむと思はるゝを別難く思てと有にて然ぞと推量るゝなり出立の用意の事と○為つゝ

為本して」は事多を略ける由なり。○のゝしるうちに」字鏡に公活ノ反灌略也諺語也耳ノ孔とありつゝは事多を略ける由なり。○のゝしるうちに」字鏡に左和久又乃乃志留

り。言騒がしき意なり。（柴花物語見はてぬ夢巻廿九に酒をのみのゝしりて打あげのゝしる）大和物語下の大江玉淵女の帝のゝしり哀がり給ひてとあり。此は別惜みて引止泣さわざなどする

由なり。（うちにはほどにあひだにと云も大方同意なり。下に）○夜更ぬ」以上は今日凡夕方までに門出せらるべきを遅く成れりし断にて戌時にと云れし時を指て夜更ぬと云るゝなり。戌時は

六半時より五半時までの間なり。戌時を一更と云り下正九にも山も海も皆暮夜更て西東も見えずとあるも甚く更たるにはあらず。

廿二日」ははつかあまりふつかのひと訓べし。はつかははたか、ふつかはふたかなるをカヨハシ通ていふ。師説にかとは来経と云言を約てけと云を通してかと云其きへとは月日の来て経行事なる由

紀伝十三の五十二丁云れたり。さて一日をひとと云は未三経行一始なればなるべし。三日みか四廿八の十五丁に悉く。日よかミツヨツと五日いつか六日むゆか玉靖日記解中二に、はての月のとをかむゆか帯本卷四十子五丁君来のに五六日と書いていつかむゆかと訓たり。ゆは音便にて延てむの韻う七日なぬかはなゝのなぬになるをゆと転て云なり通せり。八日やかを音便に延てやうかと云（定家卿鷹三百首の歌に、やうか薬師と説給へり）九日

こゝぬか、下日下日にみそかあまりこゝぬか。西川御幸歌序附注長月のこゝぬかと昨日云て、後撰秋拾遺下などにも、長月のこゝぬかとあり皆假字に書るを引つ俗にコ、ノカと云は悪し（後撰秋いせのうたの詞書に、長月

のこゝぬか云々拾遺秋ミツネ長月のコ、ヌカごとにつむ菊の花もかひなく老にける哉。帯木卅二九日のえんになとありコ、ノカと十日とをか卅日みそか五十日いか（竹八百日やほか万など云り。二百三百なども此例にてふたほみほなど云べきが如なれども然云る例こぬかを未見ず。さて十日あまり某日イタカ廿日余いくかと云り。然を十あまり二日三が又年を云にも十とせ余と

云べきを十あまり云々と云はわろし。又中旬下旬の日次を、駒比卷善滋為政に、とをかやうか、源順主の斎宮庚申夜歌序に、はつかなぬかと云り。余と不云は当時の習なめれど聞よからず。さて又古へ上旬をついたちと云て、中世殊に榮花物語に多しイタカついたち某日と云り。靈異記卅五に、延暦十

五年三月朔七日とあり卅九条九月朔四日、同条に十一月八日トアルハ朔字ヲ写漏カ。余ハ十日後ハ十七日廿三日ナド書タリ。見はてぬ夢廿九に、ついたち六日。衣珠卷に、ついたち四日なと猶多かり。（今は上旬の日並を唯三日四日と云又文などには、中の五日末の七日などいへれど

例なき事也。）望中いくか晦某日などあるは未見あたらず。（峯月巻にかくて皇后宮御なやみ云々）是は、とをか八日、廿日七日なと云て然は不云し習なりしか猶下元日に云を考べし。○和泉国マで「和名鈔に伊都三と有て畿内の国なれば海賊の畏もなく又此国より内海なれば風波の危も非ざ

めれば其迄を殊に平安にと祈らるゝなり。正月卅日条に、今は和泉国に來ぬれば海賊物ならずとあり。抄と字あり他本に從除○たひらかにと。と字他本は平安の義也。紀略延暦十三年条に宜改三山背国為山城国又子コノ如クキカルノ來之民謳歌之輩異口同辞号曰平安京ニと有。爰ニ訓注ハナケレども今に、たひらのみや

こと云ならへるもて知べし。○願たつ「按に諸の物語書どもに……人ぐわんと云りの意ノ然ればねがひと諸本あるは必誤なれば真字に書たる類本に依て今字音にぐわんとよみつ。い勢物語（勢語三十九段十九ぐわなど立けり）竹取解一いのりをしぐわんをたて思止んとすれども。さて此同じさまなるは万葉七廿一に、大海の浪はかしこし。○たつは今世にも立願立ッガクとも、ぐわん

たてすとも云立なり。然るを式人御杖カケキ旅立のたつと心得たるは誤なり。今日舟たちせらるゝにあらざれば唯彼立願をかけおかるゝ也。○藤原の朝臣藤原氏の姓はもと中臣氏にて天兒屋命を始

にて鎌足公に藤原姓を給ひし事など悉く飛騨国守姉小路家譜に云置つ。○ときざね季衍凡人名、女のかきたる由の書なれば假名なるぞ着々しき。さるを附本妙本には人名悉く言集など真字に書た

り。今解には其字を用べし。此人は紀大人の深く親しまれし人なるべし。○船路なれど馬のはなむけす」馬より行道ならねば馬のと云こと便なれば斯ことわれるなり。されどうまのはなむけと云こと旅立人ある時必するわざにて当時既に名目となれる言なれば其理に当否を不云斯云りしものなり。此言義景居翁の説あれと五十槻翁の説信濃漫録に饌は馬の始に設する事なり。宇麻は馬屋の略言、初を波那と云るは万葉九に「卯花を腐す霖雨の始水ルとある始水を美豆婆那と訓たる波那なり。大秀云俗にも水のては牟那ハは設マツと同言にて饌飲を設備て饗するを云言なれば即饌宴なるをな茶の煮はなど云り

按に万葉四に、神龜五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任シテ京ニ入ルトキ 饌三千筑前国葦城ウヤニ歌三首云々又廿七丁 太宰帥大伴卿被任テ大納言入京之時府官人等卿饌筑前国葦城歌四首云々と有ぞ正しき。饌なる当時旅行人の家をたちて最初の駅まで其家族親友など酒饌の設をして送行て離別を惜む歌よみなどして饗応せしを宇麻乃波那牟那と云るにて字書に饌慈演切以酒食送也俗に所謂送弁当なりと見えて此字義よく叶ひ此翁の説よく当れり。斯て後世には旅立人を自己が家に請じて饗応するを云は転たる物なり又酒食にはあらで、扇燈袋などを贈与るを饌と云は更に不当。古は饌は饗応の方にて贈物は別に贈し事世々の撰集の詞書などに見えたり。其は字書に饌ジ与レ費同徐刃切ス、ムニ音應 贈レ送行者ニ贈賄之礼也。送行賤幣と見えたるは当れる。

(初稿)

○船路なれどうまのはなむけす」馬より行道ならねば馬のといふこと付なければ斯ことわれり。されどうまのはなむけと云ことは旅立人ある時は必するわざにて当時既に名目となれば其ことわりにあたり不当を不云かくいへりしもの也。景居翁の説に古へ旅行には其人の乗べき馬の鼻弦を其行方へ向へて祝事して、たゞせけるが本にて 此頃は 旅行人を喚て饗し盃取かはし別惜むのみにて必其態せねども馬のはなむけと云りしなるべし。藤井氏は勢語新釈「四十三段」に別路に馬を留て馬の鼻を其方へ向けて旅立行人を暫見送り出たる言なるべしとて景居翁の説はたがへりと云れ(たれど大秀は不諸必酒饌の設あれば其前日にもすべき事勿論なり。さて翁の説にさのみ違へる処も無を深とがめたるは此人のクセ也——頭注)と大秀は佳説ともおぼえず。又五十槻翁は饌は馬の始に設する事なり。うまは馬屋の略、初をはなと云るは万葉に卯花を腐す霖雨の始水ルとある始水をみつはなと訓たるはななり。むけは設マツと同言にて饌飲を設備へて饗するを云言なれば即饌宴するを知べしと云はれたり。

(貼箋)

舟路なれど云々 駅伝ひに宿つゝ経行旅ならねばかく云ては不応由をことわれるなり。されどうまのハナムケと云事立旅人ある時は必するわざにて当時既に名目となれゝば其理に当不当を不論かくいへりしものなり。五十槻翁(空白)説に饌は馬(空白)知べしと云れたり。景居翁説は古今打開八に見え、藤井高尙説はいせ物語新釈に云にたれど略つ。猶按に旅行人を其最初の駅までおくり

行ていはひ事する酒饌の設即今世の送并当なる由の名目にて此翁の説ぞいとよく叶へりける。万葉に……

と見え、此日記の館を出られて後舟におくられるも同じ例と見べし。さて後は其道発の日にはあらで前日早くおのが家によびて饗応爲しをもしかいへるは（以下のつゞき不明）又饒字音勢牟とも云しは（焼失）て便利になれる物なり。然るを今俗に（焼失）酒宴はせずして物を贈れるをいへるいたくたがへる事なり。（焼失）又旅立人の家に（焼失）をおくるをもしか云。枕冊子二の

すあまじき（焼失）の中に、産養に馬のはなむけなどの使に禄などとらせぬと有。弥後には酒饌料なればとて金銀を贈れるは猶其なごり有を今俗に旅行人に贈る物を何にても打まかせて馬のはなむけ或は饒別と云物と心得たるはひが事なり。拾遺集（空白）に天曆の御時……（空白）ものへ……（空白）つかはしけると有、饒と贈物と別なるを思べし。さて字音にせんとも云へり。字書に（以下のつゞき不明）貞時のみこの家にて藤原のきよふが近江介に罷ける時にうまのはなむけしけるによる。

○酔すきて抄本あきと有も聞えたれと源氏物語にもある詞なれば考灯に從改按に酔て心の進むを云言なるべし。此は酔のすさみに痛く戯遊レを云り。葵卷車争の処に行方にも若き者どものあひすき立駭たる程の事はえしたゝめあへず

と有もそゝろに心進てイみ争由なり。按に此言は古事記樞原に立走伊須々岐伎とある言を略て須伎と云なるべし。伝八に伊須々岐は即驚て立走さまなり。榮花物語赫藤にそゝき立て、狭衣に若宮おはしてそゝきありき給ふ須と曾とは通音なり万葉十六九丁に古部狭々寸為我哉とあるも少年のすゝろき駭を云り」とあり。すゝろそゝろも同言にて酔て心不鎮ツラ唯一途に思が如く心の進儘に物する由

なり。是は鈴木氏の説に酔過には非ず。き字清て云べし。酔すきて俗に酔狂と云言に当れり。スキ／＼シ、スキガマシ、スキ事、物スキ皆其意なり。スキワサは好色人風流人なりとのみ云て狂をスキと云委しき解なければ、大秀此度種々に思たとりて云出つるになん。好字を常にスキスクと訓も心進て其事に心を深く係る由にて同意なるべし。此説鈴木氏の意には叶へりやあらずや不知かし。○上中下」抄本かみしなかも類本かみは紀大人に従人々上中下の人品なり。続紀宣命（空白）に諸奉マツルツカヘ侍上なりしもと誤れり考本ニ從改は紀大人に従人々上中下の人品なり。続紀宣命（空白）に諸奉マツルツカヘ侍上中下乃人等乃。伊勢物語八十一段河原院の条に此殿の面白さを誉る歌かみなかしもよむなとあり（正月廿一日衆）にも

今は上中下の人も是は天下の貴賤上中下也）（解四の四十丁）○酔すきて考灯本は葵卷六丁に車争の何方に從改今も若き者ともあひすき立駭たる程の事はえしたゝめあへずとあり。鈴木氏云すきは清音き字すべて俗に酔狂と云意に当れり。（スキスキ）すき／＼し酔狂ラすきかまし同上すき事酔狂又物スキ意なり此説により考本に依て改つ抄本に酔あきて下に酔すきわざは好色人風流人スギて凡て過にはあらじと云れき。本に依て改つ抄本に酔あきて下に酔

物すきある人を云すは色々好なりスギ過にはあらじと云れき。本に依て改つ抄本に酔あきて下に酔

してとあり。（コノ酔すきてノ部分ハ初稿ラシク朱線ニテ囲ム。抹消ノ意図カ）○いととは甚なり。紀伝六の十一丁可考○あやし／＼は師紀伝三の四十丁云阿夜は驚て歎声なり。奇し危しなども歎てアヤといは

るゝより出たる言なりと云れき。尋常ならず其事の心得られぬを云言なり。物語書どもに悪き物を禍マカと綾アヤと通てあやまつ人をあやむるなどの類マカ未考。此事は紀伝三十四丁に出（いと之事ハ今少クハシク、アヤシノ事ハ略スベシ）○潮海のほとりにて、魚肉に塩を加ふれば不鰓アサレヌを塩海の辺にしも人のあさるゝがあやしとなり。○あさ

れ」は猥がはしく戯るゝを云言なり。夕顔巻に、(空白) あされありく。狹衣物語一の上に(空白) 中々なる事云出てあされたりとやおほせん。又あを略てされとも、今俗シヤレともチャリとも云り。又其を活用せて、さるがふとも云り、あされの事猶猿樂の考は荏野冊子にのせつるを可考。されを洒落の義とし又下学集に左道の次に左礼戯也と云るは左礼を正字と心得たるにや、非なり。附注にいはく花宴卷十二に右大臣の許に源君の物を皆人は袍ハッヘキヌなるにあされたる大君姿のなまめきたるにて有て、行幸卷十五に源君三条大官を訪給ふ処に君たちは云々物々しう云々いたうしうとくに面持あゆまひなど大臣と云むにたらひ給へり。以上内府の容鉢六条殿源君は桜の唐の綺キの御直衣に今様色の御衣引重てしどけなき大君姿いよ／＼譬む方なしとあり。大宮の君たちは袍にて正しく源君は皇子にて打とけたる容鉢なりかゝればあされたと花宴にいへるも、しどけなきと行幸にいへるも共に同状なるにて明らけし。春海翁云あされは肉の鰓アサと同語にて人の上に云は乱たる様を云なるべし。此に塩海の辺と殊更にかけるは塩ある海辺にても人はあされあへりと戯かけるなり。其は魚肉に塩を加れば不鰓物なればなりと云り。和名鈔に野王按鰓音乃和語魚肉爛也。字鏡に鰓反鰓音魚乃字典に鰓類篇作鰓魚敗也とあり。肉の爛損を云も人のしどけなく乱戯ミタシタルを云も同意なり。○あへりり字考本に従諸本と誤れり。催馬楽に、むしろたのいつぬき川(體原抄可考)に住鶴の千歳をかねてぞあそびあへる。初音卷園固の処に云々そほれあへりと有。(紫日記)

廿三日八木ヤギのやすのりといふ人あり此人国にかならずしもあてつかふ人にもあらざなり是そたゝしきやうにてうまのはなむけしたる。

○康教の姓、八木抄為附とも、山本妙素とも、元假字に書たりけん有て定ざりしを土佐人武藤平道

が地名考の末に今長岡郡新蚊居村長久寺の本尊の台座に地藏菩薩修覆永徳式壬戌正月四日始檀那伊豆守八木康綱願主権律師頼意仏師音阿弥と見えたる康綱を康教の裔にやとおぼし蚊居は国府近き村里なれば由ありけにおぼゆと記したり。是実に慥なりとは定難けれど姑此説に従つ。八木氏

は姓氏録中の七右京神別地祇の下に八十造和多羅豊命兒布留多摩乃命之後也とあり。山氏は宿禰公直、首、ある

中にも猶数種あり此姓の事詔詞解○やすのりと云人あり附本此にて字あり○此人国に附本にて此字なき附本は一国と聞ゆ一國の事一日と云一に此人土佐ヒトクニ一国にての由にやとも思へど猶此字ある(空白)本を取つ以上分注御杖云国にと云は国務にと云意なり。国務に閑らぬ人なるを云なるべし。国務に閑る

人ならば常睦ムツしかるべきを思べし云り。然ればにて有ては聞えず。○必しもあてつかふ人にもあらざなり抄本はいひつかふものにもあらざなり考と鈴朱とはなり二字無附本いてつかはるゝ人にもあらざなり類本云々あらざなり、など諸本区々なるを彼是取合假字をも改て本文としつ。○必しもとは国務に閑る人にもあらねど又除かれぬ人にて国司の下に属べき人にも非と云意か。御杖云しもとは除むとすれど除難き由を云言なりと云り。○あてつかふ人にも非とはつかふは守の使てに守の方に付教云言つかはるゝは康ふ其家柄の勝たるを云るにて国守といへども引率したがへて使まじき人と云に

や、猶誤脱あるか。熟くは聞得がたし。○是そたゞしきやうにて馬の餞したるはそれにたかはしきとある本附考あり。其とは上を受て必しも率てつかふ人ならぬと云意。然るを例に違たる様にてと云ことか。又其には凡の国人の薄情なるに康教は違たる様にてか。それに。とは結の辞格違へるやうなれと所謂変格の哉を略例とすべし。下の不恥来なん来けると有りしは此方も叶て聞ゆめり。又たゞはしとある拾類灯の本も捨がたし。字典に偉増韻大也、綏靖紀にタ、ハシと訓、万葉二の廿七丁に望月の満はしけむとありて満足へる意なれば是もよろしく聞ゆめり。○是ぞとは格別に引立たる言にて正しさへ係れり。此国人の習ひ大方不ナ礼レげにて物每正しからぬを康教は礼義正しく餞すべき人も餞せぬ勝カチなるを此人は餞センせでも有べきがしたるを悦ばるゝなり。又按に昨日言実の餞には皆打鎔あされしに今日は正しき饗応にて余り不ナ打鎔トク一由にも聞ゆめり。景樹云康教俣従などには召出つかふ列の人にもあらざれば餞ノサマモサスガニ礼ヲ尽シテ昨日ナドノ打解テアサレン類ニハアラヌヲ是ぞ正しきヤウニテト云ルナリト思フ。

神からにやあらむ国人の心の常として今はとて見えざるを心あるものはちすきなむ来けるこ
れは物によりてほむるにしもあらず

○かみからにやあらん」藤垣内翁云かみからは万葉にも云る神柄なり。即其国の習はしの事なり。物語書にも人がら所がら時がらなど云俗にも家柄などいふと云れき。続紀十五の四丁に天皇御製歌天平十五年五月聖武天皇に、そらみつ倭の国は可未可良斯たふとく有らし此舞見れば。万葉卷二柿本人麻呂に、玉もよし讃岐国は国柄か見れどもあかず神柄かこゝだたふとき。又十七上賦に神加良夜そこはた

ふとき山からや見がほしからむとあり。猶按に神柄は其国津神の御心に従てと云意なるべし。万葉卷一に、篠波の国津御神のうらさびて荒たる都みれば悲しもと有に然思はるゝかし。御杖は康ノ

リが愁に餞するは国守の徳然するにやあらんと云也と云。景木も守がらにやあらん、コノカラは心あるものはと云にかゝれる也といへり。何にてや有べし。景云此からは故のことなり。大秀云守からにはあらじ、さては常としてト云ニ不叶。○国人の心の常として」は国神の心に依て国の人柄実少なき常の習なり。○今はとて、今はとは限ニ至ル時ライヘリ。古今秋上今はとてわかるゝ

時は天の川わたらぬ先に袖ぞひちめる。サアモウト又滋傷テと誤タリ又滋傷詞書に、甲斐国に云々にはかに病をして今々と成にければかりそめ云々哥（今々ハ命の極たる由なり）新古今政撰暮秋のうたに、立田姫今はの

比の秋風に時雨をいそぐ人の袖かな。されど此処はさる意とは異べし。今よりは用なしとてノ意ナルベシ。猶可考。○見えざるをさハ妙考に従改抄はずとありを字鈴朱なしは任満て帰京に及ばるれば薄情の輩は今

まで媚コヒヘツラヒ詔しも今より前司に用なしとや思らむ。来人もなき国人の並ての效はしを憎まれたるなり。

見えずとは不コズ来と云に同じ。上廿一日条に、よくみえつるとあるも来つるにて、崇神紀十年に倭迹々日百襲姫命為レ大物主神之妻ミコトニハナ然其神常昼不レ見而夜来矣。倭ト、姫詁カタリテニ夫曰君常昼不レ見者

分明^{アカリカニ}不得^レ視^ミ其^ミ尊顏^{イカホウ}願^シ暫^ト之^ヲ云々。貫之集^{十五}に、春雨に道惑はして我宿に久しく見えぬ人も見えなん

(万一四^{卅四}に、大伴坂上郎女に通^{ハセ}為^ル君毛不来座玉銚之使母不見成奴^{イタモ}レハ云々スヘナミ。古今の雜ノ下^{今ぞしる}哥^ノの詞書に、紀のとしさだ云々夜更るまで見えざりければ)玉蜻日記^{解環二の十四丁}の許^{兼家公通給ふ事}に

九月に成ぬ曉方に頻に二夜ばかり見えぬ程文あり云々返事書あへぬほどに見えたり。又程経て見

え怠^ヒほどなど云々今世も云同意なり。(御杖が年来寵遇せられて善^{ツルベシ}かりしを云なるべしと云るは

たがへり)○心あるものは「は康教言実など篤実なる人々にて送に度々来し人々までへ係て見べ

し。○はちずは不恥なり。ナホ次ニ云べし。○きなんきける^{上のき妙本に従改下のき}は、米なん米

けるなり。下の^{二七}条^哥に、来^来ときてはと。宇治拾遺^{六の}十^丁に^{男谷に落入て岩}頭^{に止たる処}に物^ののそよくと来る心ち

すれば何にかあらむと思ひて見れば大なる蛇なりけり。さしにさして這来れば観音助給へと念じ

入て在ほどに唯来に來て我膝のもとを過云々とある同意にて、さしにさし、来にきてなど言を重

て云へば強く聞ゆるなり。○抑国人の心の習として紀大人任中には追從せし人々も今帰京の期に

成ては疎くて饗しらふ事もせぬをよきこととしてをさ／＼来人もなきを稀にも篤実なる康教など

の如く心不變守を敬ふ者をば不実薄情の輩は却て嘲弄笑などもするを康教などは然^{サヤウ}様の人の嘲

けりをも恥かしとせず其輩に^{ツラヒハトカ}詔^ハ憚^ハる心もなく来てこそ来つれと剛く云立^チ替^ハる意なるべし。本

居翁の神柄の説に従て(此説御丈景木にはたがへれどこゝには□なし——書入)来なん来けると

訓るは大秀が思よれるなり。猶いかゞあらん(御丈の説は違へる事あり景木説大かた吾云に同

じ)。○按に廿二日あされあへりとあるに言実は心鎔て甚親しく廿三日正しきやうにてとあるに

康教は親しからず疎からぬ由見えたり。言実は彼年来能見えつる人にて常に親まれし人なれば餞

するも話なれば左右^{トカ}と論はれぬを康教は不疎又親にもあらぬが正しく餞したる人柄意ばへを誉、

今はとて見えざる並ての人は任中は追從し詔らひつれども実意なく人柄悪き由の三を書頭はされ

たる文なり。○これは物によりてはむるにしもあらず」とは餞に贈れる酒饌も善けれど其好に附

て誉には非ず。元来康教等の人柄本性^古のよきを誉らるゝ由なり。贈物に依て誉るは賤しき意に聞

ゆれば其を断られたるなり。

廿四日講師うまのはなむけしにいてませりありとあるかみしもわらはまて酔^{イナ}しれて一文字をたに

しらぬものしもあしは十^{ジツ}文字に踏てそあきふ

○講師^{附本に新司と}は^{あるは誤なり}(後撰雜一^{忠岑}哥詞に忠房朝臣津の守にて新司はるかたが設に屏風調じて彼国

の名ある所々ゑにかゝせてさびえと云所にかけりける。たゞみね^{治方}年をへて濁だにせぬさびえに

は玉もかへりていまぞすむべき)旧は^{モト}国師と云是も任限有て京より下されしなり。故紀大人殊に

親くせられしなるべし。景本云紀氏は尤^{モト}弘法キエの人なれば殊更に親しみ交られしなるべし正月二日にも物酒おこせたりとあり。統紀

に文武天皇大宝二年二月丁巳任諸国国師と見ゆれば、もとは国分寺建られしより先に有しものなり。されど聖武天皇国分寺御建立の後には国分寺に置れしものなり。国分寺の事は荏野冊子に云置つ。土佐国分寺長岡郡に今も有よし平道が地名考に云り。国師を講師と改らし延暦十四年八月十三日太政官符に偁る事類聚三代格^{卷七ノ}に載たる太政官符にみゆ^{逸史卷四に漏して卷三十八延暦三、五辛未朔任限六年}後紀^{卷十三}に延暦十四年十月庚申、廿五日なる事^{十四に符を引たり}僧綱言、延暦年中月なり改^テ諸国国師^ヲ一任之後不^レ聴^サ輒替^ニ講説之外莫^レ預^ニ他事^ニ欲^レ能弘^ク道教^ヲ以利^ニ人^ヲ也今聞或身期^ニ老死^ヲ情無^ニ知足^ニ既倦^ニ講席^ニ玉篇都蓋切邪^也何堪^ニ誨導^ニ遂使^ニ汚^レ法墮^ニ罪背^レ師棄^ニ資加^ニ以当国司等檢^ニ掌伽藍^ニ諸寺綱維趨^リ走府庁^ニ此非^ニ道俗異^ニ形魚鳥殊^ニ性^ニ之^ニ意^ニ伏望^ニ簡^ニ大智^ニ而任^ニ講師^ニ拳^ニ小職^ニ而補^ニ読師^ニ限^ニ六年^ニ為^レ期其寺委^ニ寄講師^ニ然則用^レ人^ニ之策永存媚^ニ俗^ニ之辱自息勅其講師年限一依^ニ来請^ニ但浅学之輩未^レ練^ニ戒律^ニ年少之人時聞^ニ違犯^ニ宜^ニ下簡^ニ不^レ易者^ニ補^ニ之簡^ニ才用^ニ讓申^ニ官經^ニ奏等^ニ一同^ニ前格^ニ若有^ニ下事^ニ銜亮^ニ妄求^ニ俗拳^ニ者^ニ年四十五已上心行已完始終永從^ニ擯出^ニ以懲^ニ後輩^ニ如綱維受^レ嘱亦捺^ニ情論^ニ之其読師者依^ニ旧用^ニ之又部内諸寺者講師国司相共檢校不^レ得^ニ独恣^ニとあり、御杖は官符^{十四丁}を引り。玄蕃式に凡諸国国分二寺依僧尼見数每寺起正月八日迄十四日転読金光明最勝王經其施物用当処正税云々凡諸国起正月八日迄十四日請部内諸寺僧僧於国庁修吉祥悔過国分寺僧專読最云々^④凡諸国国分寺僧尼以去年定数勘注一卷当年三月一日移送主税寮。講師法服云々^{④十八丁}勝王經不願此法^{④十九丁}読師法服。凡諸国講読師者寮与僧綱俱孟冬一日簡定牒送省云々但其牒不留寮家副寮解送省一亦加解文共進官即經奏聞明年二月以前下任符其装束程云々。凡諸国講師^{④二十四丁}抵二年四十五已上読師四十已上者^{④廿四丁}補^ニ之但雖階業已滿之輩而年限未^レ及不^レ可^ニ擬補^ニ。凡安祥寺果^ニ階業^ニ僧^ニ擬^ニ補諸国講読師^ニ。凡延暦寺三綱一任之後任諸国講読師^ニ其上座寺主任^ニ講師^ニ都維那任^ニ読師^ニ。凡諸国講読師不^ニ与解由状前後司連署踏印国司押署限内言上其与不^ニ之限講師者准俗官受領読師者准任用^{猶引出へき事多。かれどとくめつ}。○出ませり」は来ませりと云を敬て云れたり。古事記に天皇の御こと多く幸行と書伊提麻志と訓り。伝^{十一、四丁八}に書記に臨字来字をも然訓り。行のみならず来をも云は今の俗語に行をも来をも御出なさると云と同じ。是は天皇に不限尊ては誰上にも云言なり。万葉八部^{相聞}に紀女郎歌と有とぞ然ればこは王に贈れりし歌か。闇ならばうへも来まさじ梅花さける月夜に伊而麻左自常屋とあり。○在とある」は紀大人に従へる者残なくに講師の従者も有べし。○上下」廿二日条には上中下と云る同意にて別事なし。此は中を略て云るのみなり。○童まで」は皆熟醉たる由を懇に云むとておとなは更なり。酒はをさをさ不飲童に迄多飲過て酔つとなり。○酔しれて」は甚く飲酔て愚に成るを云。をとめの巻に(空白)大將益さし給へばいたう酔しれてをる顔つき云々。竹取物語(空白)あれもたゝかはで心は唯しれにされてなど多かり。愚人をしれ物と云は賢き人は己が心根を顯さぬを愚痴なる者は至浅くて心底のはかなさを易く他に見え知らるゝより云なるべ

し。今の俗言にもかゝる意なるを云へり。○一文字をたに」は次に云べし。○しらぬものしも」は我徒山崎弘泰云、諸本者しかと有を（しは助字し字か。考証に国譲巻に、いかに是しか為に嬉しく侍らはまほしく侍らんと有と云り）美木しはらの誤ならんと云るもよけれど、かをもの誤として者しと訓べしと云り。さては上のだにと云辞にも熟く叶て聞ゆれば改、姑く然訓つ（玉の緒五七こそをしかと結ぶ格の下にこそといはずしかと止は大かたわるきよし云、此を引て此しか珍らしと云れたり。按に是は、だにもとつゞく意なるを詞をへだてゝしの助字を加へて云る也。同巻左に古今十秋風は身を分てしもふかなくに人の心の空に成らん）○足は十文字に踏てそあそふ」字典に一は於悉切又益悉切並滴入声広韻教之始也物之極也とある韻の入声を転て伊知と唱皇国の音の效なり。一字は教の始にて大方能人の知れる文字なれども其をだにえしらぬ幼き童卑し従者等なる由なり。字典に十寔執切音拾、説文十教之具也、一為東西一為南北一則四方中央具矣易数生三千一成一千一とあり。酔たる足の定らず東西に歩南北に行を十字の横に引堅に引さまに云成したるなり。景木云手シテハ一文字引コトシラヌ者モ足ハ踏交ヘテ十字ニナシテタシロキ戯ル、ナリトイヒ又契冲阿闍梨云白氏文集に輕衫細馬春少年十字津頭一字行（下学集尺八の下に古句云十字街頭吹尺八とあり。）とある句を思て書りと云はれたる由美木注に云り。さて是をヒトモントモシと訓ては字の数一十と聞ゆべし。さればヒトツモシと云べきか一ツと云文字と云義なり。徒然草に平仮名のこの字をふたつもしとよめる歌を載たり。十をツモシと云しか（玉勝間十三丁に文選の古訓に十をつゝとよめり下のつは一ツ二ツのツなり上のつはとと通音なれば即と也）。和名鈔道路類に、十字奥均行云（以下 空 白）とあるを今つしと云り。當時はツモシと云しにこそ。トラをトと約めて転してツといひジは字なるべし。谷川氏は旋の義とせり。斯て上をヒトツモシとよまば下をトモシと読べし。されど猶紫式部日記三才に自己の上を云る処に一と云もじだに書わたり侍らず甚手づゝにあさましく侍りと有に依て此もいぢもしふもしとよみつ。按に今文盲なる由を云に一の字もしらぬ或はいろはのいのじもしらぬと云へり昔よりも然云習つらめど紫式部御許若は此を取て書れたるにも有べしさて或人此をイチモン字シフモンジとよめるは皇国の物。さて按に講師は学問の達人人なると賤しきものゝ一字もしらぬと大に異を對て智人も愚人も同じ様に酔りとなるべし。又景云講師ノ入来ト云ヨリ文字シラヌ者モ文字ヲナシテ遊ぶト云ナセルナト殊ニヲカシキなりと云り。

廿五日守の館よりよひにふみもて来たり喚れていきて日ひとひ夜ひとようとからす遊やうにて明にけり

○守の館よりよひに文もて来たり諸本たれりと新司より文もて前司を請せらるゝなり。喚て饗應せらるゝは不敬の様に聞ゆめれど然らず。是は唯酒饌を贈らるゝ計にては不飽又舟中物毎に自由ならねば請て寛らかに心をも慰め参らせんとてなるべし。されば夜をも明して二日係ての饗應詩

歌の興など甚^{オゴシ}厳なりけむを思べし（景木云長曆もて推に此廿五日は節分に当れり。さらば凡寝ぬべき夜ならねばさる方に取て夜を明さるなり。年ころ住狎し館なれば打とけさゝめきて明されけんを遊やうにてと云るなるべしと云り）○よはれて「人の招請に応じて行て饗応にあふを今もよばれていくといふ事當時に異ならず。○いきて諸本いたりて附為に從今鈴木氏云いくは漢語の往ワウゆくは行なり。往をいくとは云もすべし。行をいくとは云事なし。字典に往レ説文之也王篇之行也去也又古往左歩從干右歩也左歩具拳而後為行者也広韻適也往也去也と見え訳文案歸に往ハ来と對し還ハ反後と對す行はアリク事故往も反も皆行なり往は先へ行ばかりなり又日月にても何にても過去し事を往と云行は止の反なり往は来の反なり御杖云いくは此処を去なり。ゆくは其路を係て云言なり。此は路を係て云に非と云り。大秀按にいくは（いかん云々四段いなん云々四段いに……中二段に活けり。往いなんいいきいぬいねいぬるいぬれ 一可考。往をナマスと云事は坐と同意なる事記伝卷に委云れたり）其行到べき先を差て云言なり。生と往と兼たる歌多し。後拾遺内侍部に死ばかり歎にこそは歎しかいきて訪べき我身ならねばなどよめり。いたりてと有も悪からねどいくの方附本勝れり。○日ひとひ夜ひとよ」は朝早く喚に來て疾往て終日終夜遊て猶翌日も遊ばれしなり。大和物語七段に此前妻後妻ひとひよ万事を云語合てつとめて舟に乗ぬともあり。又終日尽日をひねもす、ひぐらしとも云ひ終夜通夜を夜すがらと云。万葉二廿四長歌に夜者夜尽屋母日之尽師説に尽是コトトと訓べしと記伝十七八十丁に云れたりともあり。十二丁右に全夜をひとよとよめり。凡一某と云は不達処なく物の充滿たる意なり。須磨卷に（空白）涙を一目うけて玉靖日記に長谷詣の婦さ宇治川の処に鵜飼数を尽して一河浮てさわぐ。大和物語に段良少將大徳を清水寺にて見うしなへる処に。一寺もとめさすれど更に逃て失にけりとあり。俗に何事にも一盃と云、又ヒ、テ、ヨッヒテと云は此訛れるなりと鈴木氏云れき。○うとからす附本に従諸本とかくと有ルハうすヲ脱しらくに誤れるな。○あそふやうにて明にけり」はやうにてと云事不疎ウツカラズの下遊の上に有意に聞べし。新司は元來親しきには非ぬを今日喚れて來て、始て親しまれければ疎からぬ様にてとは云るゝなり。

廿六日猶かみの館にあるあるししのゝしりてをのこらまてに物かつけたり。

○猶は前に有し事を受けてまだ云々の事ありと云事なり。○守の館にあるに本館にてとあり附本。○あるしし附本し字あるじすとは神代紀海神宮段に、是時海神自迎延入乃鋪ニ設海驢皮八重ニ使レ坐ニ其上ニ兼設ニ饌百机ニ以レ尽ニ主人之礼ニ云々と見えたり。主人の礼を尽は饗応なり。故酒饌を設て客人をもてなすをあるじと云は、客に對へて主方の態なれば移転りて饗応を云言と成れるなりけり。

○のゝしるは置しく云躁攪ひ営むを云。上にも注つ。○をのこらまてに、附本らうとう素本郎あまたになど有は誤、卑しき下男等までなるべし。○物かつけたり」は中下ナカシモの人に物とらするは多く衣を脱て与ふるより起りて、衣を得て被より云なるべし。さらぬ物にても取するをかつけ物とも又縁とも云り。（景——云かつけ物は引出物なり）大和物語（空白）、泉大將定國故左大臣殿時平詣に給ひけり。其夜一夜大みきまあり遊給ひて、大將に物かつけ忠岑にも縁賜ひなどしけ

り。又(空 白)亭子帝鳥飼院に御座けり云々、大江玉淵女浅緑云々とよむ時に帝のゝしり哀がり給ひて御桂^{ウチキ}一重袴賜ふ。在と在上達部皇子たち四位五位是に、物脱てとらせざらん者は座より起ねと宣ひければ、片端より上下皆かつけたれば被余て、二間計に積てぞ置たりけるなどあり。猶禄の事は竹取^{可考}(○おくり物、桐壺十五丁、□□□十丁、内の御使に命婦の来たる処、おかしき御物語解 おくり物など有べき折にもあらねば、たゞかの御形見にとて云々、装束一くだり御匣物の調度めく物そへ給ふ。□二、客のかへるを送る時に賜る物と云て送り物也。)(未完)

